

親の会をより

題字 昭和五七(一九八二)年当時使用

第100号
記念特別号

発行日 令和2年10月10日
発行 岩手県ことばを育む親の会
会長 主演 友子
事務局 盛岡市立桜城小学校
きこえとことばの教室内

親の会だより100号を寄せて

岩手県ことばを育む親の会会長 主演 友子



お陰様で、これまで多くの方々のご協力により「親の会だより」第一〇〇号の発刊の運びとなりました。昭和四〇年に初代会長落合新作氏がこの教育の必要性を同じ悩みをもつ親たちと関係機関に働きかけ、親の会を設立、その後、教室設置運動には、多くの方々のご支援、多大なるご苦勞を頂き「こまで歩む」ことができました。担当されてこられた先生方や関係機関の皆様方のご理解・ご協力の賜と心から感謝申し上げます。

時代は昭和から平成、令和へと変わり、この五年の間に、難聴言語障がい教育も特殊教育から特別支援教育へ移行、さらに、通級指導教員の配置についても平成二九年にこれまでの「加配定数」から「基礎定数」へと改正が行われました。また、親の会は、平成二五年に県内三三市町村全てに「ことばの教室」開設という悲願を達成することができました。常に子どもを真ん中に、先生と親とが両輪となつて子ども達の指導が適切にできるよう、教育環境整備をお願いしてきたことが叶えられました。

岩手県における通級指導教室の対象の子ども達は、当初の「言語障害及び難聴」から広がりを見せ、今日では発達障害が加わり、当然、そこに対応した親の会のあり方も求められております。

親の会の運営について、これまでのリーダー研修会をブロック毎の研修会に変え、地域での活動を活発にすることが大切であると考え、各地区にて開催していただいております。地元で開催することで、たくさんの方々と交流を図る事が可能となり、会員の声もあげやすくなったと思います。そのような中では、支部リーダーが会員の皆さんと活動をとにもすることで支部活動にも効果が表れ、地域への啓発活動にも繋がっていくものと思っております。

さて、東日本大震災や連続する台風による風水害等により大勢の人が犠牲になり家財を失い、幾多の困難に直面したことには、本当に心が痛みました。その折り、全国ことばを育む会や、県内親の会会員の皆様、外国の方からも沢山の義援金を賜り、被災地域のことばの教室の支援に生かすことができました。改めて心から感謝を申し上げます。

今日も、新型「コロナウイルス」の感染が全国に拡がり、人々の暮らしが大きく揺れています。皆様には不安とストレスで、心身共に疲れのことは思いますが、子どもたちにも気を配りながら、頑張つてまいりましょう。最後にになりましたが、いつの時代も親が子どもを思う気持ちは変わりません。親の会は今後、子どもたちの健やかな成長を願って、担当の先生方や関係機関の皆様方のご理解・ご協力をいただきながら「たれでも、いつでも、どこでも」適切な教育を受けられる体制の充実をめざし活動を進めてまいりたいと思っております。

「ことばを育む親の会」の歴史

岩手県難聴言語障がい教育研究会 会長 佐藤 智一



岩手県ことばを育む親の会の会報第一〇〇号発行、まことにおめでとうございます。昭和四〇年に岩手県ことばを育む親の会が結成され、一二月には会報第一号が発行されております。以来、五五年にわたる親の会だよりは、そのまま親の会の歴史であると思っております。

今回、五〇周年記念誌「あゆみ」を再度読ませていただきました。親の会設立の経緯、ことばの教室設置の経緯が詳細に書かれております。昭和四〇年一二月二五日に発行された親の会会報第一号からは、初代会長、落合新作さんのことばの教室設置にかかる強い願いが伝わってまいります。何も無いところから、親の会設置、ことばの教室設置へ至るご苦勞はいかばかりであったでしょうか。そして、昭和四二年、釜石市立大渡小学校に最初の「ことばの教室」が設置された時の喜びはいかばかりであったでしょうか。

親の会はその後も著名活動や、相談会・陳情等を積み重ね、各地で支部も結成され、昭和四三年には親の会第一回県大会が、来賓に鈴木善幸衆議院議員、横田千工県議会議員をはじめ多くの来賓を迎え、三〇〇人を超える参加者のもと、岩手教育会館で盛大に開催されております。以来サマーキャンプや、研修会等、充実した活動を積み重ね、現在に至っております。

ことばの教室設置活動も実を結び、昭和四四年には県下二校目として、桜城小学校に「ことばの教室」が設置されました。以降、毎年のように各地で「ことばの教室」が設置されるようになりました。

このように振り返ってみますと、親の会の活動が実を結び、各地に「ことばの教室」が設置され、昭和四五年の難言研の結成に至ったことがよくわかります。難言研として、親の会の方々の願いに応えるべく、さらに研修等を充実させていきたいという思いを強くいたしました。親の会の方々には今後とも変わらぬ「支援と協力」をお願い申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。

親の会活動に永く関わっていただいている方々から寄稿いただきました。

全市町村にことばの教室ができるまで

岩手県ことばを育む親の会 相談役 菊池 義勝

* 菊池先生は県内最初のことばの教室担任です。親の会や先生方の指導にもあたられました。



1 最初のことばの教室

昭和四〇(一九六五)年七月二五日、釜石市立大渡小学校で「ことばの不自由な子の教育相談会」が開かれました。遠く盛岡、福岡(現二戸市)等市外からの来談者もあり、その場で「岩手県言語障害児をもつ親の会(会長渡合新作氏)」が結成されました。会の目標は、釜石に「ことばの教室をつくる」でした。

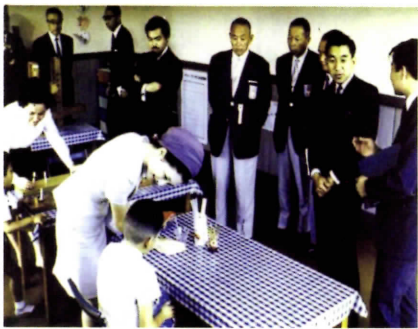
釜石市は翌四一年、仙台市に研修教員を派遣し、翌四二年四月県下初のことばの教室を大渡小学校に設置しました。同年一月二二日には、ことばの教室初の退級生二名が誕生。新聞、TVで大きく報道されました。これが大きな契機となって翌年(四三年)盛岡市でも教員二名が研修に派遣されました。

2 ことばの教室設置運動

親の会では県教育委員会とも話し合い、「盛岡市、花巻、北上地区、水沢市、一関市、大船渡・陸前高田地区、宮古市、久慈市、そして福岡町(現二戸市)の8地区をことばの教室開設「重点地区」とし、先ず「盛岡市」への開設を目標に運動をはじめました。運動が実り昭和四四(一九六九)年盛岡市立桜城小学校に教室が開設されました。これを契機に県下各市町村に「ことばの教室開設」の機運が高まってきました。

昭和四五(一九七〇)年には、水沢市立姉体小学校、宮古市立藤原小学校、そして久慈市立小久慈小学校に教室が開設されました。この年は岩手国体が開かれ、皇太子殿下、同妃殿下が大渡小学校の「ことばの教室」を訪問された事も、各地に設置された「ことばの教室」が広く認識されました。

また、県親の会は地区親の会と連携しつつ未設置市町村へ「ことばの教室設置運動」を展開していき、大きな成果をあげ、平成二二(二〇一〇)年頃までに、県内ほぼ全ての市町村に「ことばの教室」が開設されるに至りました。



大渡小学校ことばの教室を訪問された両殿下

令和2(2020)年度の教室設置の状況



- 県内33市町村中 -		
ことばの教室	72教室	14市15町4村に設置
きこえの教室 (小)	21教室	10市 3町 //
(中)	11教室	7市 //
LD等通級教室(小)	16教室	9市2町 //
(中)	12教室	8市1町 //
幼児ことばの教室	24教室	14市3町 //

3 最後のことばの教室開設(田野畑小学校)
 多くの市町村に「ことば、きこえの教室」そして、「幼児ことばの教室」が開設されましたが、「九戸村」「田野畑村」には教室が開設されませんでした。
 平成二二年、親の会参与であった若松三郎先生と私は、九戸村教育委員会を訪問し、「本県でことばの教室未設置は二つの村だけです。是非教室設置を。そのために村内小学校でことばの検査をお願いします。」と訴え、「費用は、県親の会で負担します」として、村内小学校での「ことばの検査」を働きかけました。
 その後村内六つの小学校の検査を実施し、検査結果を基に「ことばの教室開設」を強く勧めました。
 翌二三年、九戸村立伊保内小学校に教室が開設されました。
 残る未設置村は「田野畑村」だけとなりました。
 平成二四(二〇二〇)年六月、田野畑村への教室開設を願い、方策を考えました。幸い教育長さんが、若松先生の旧知であることからお会いすることが出来ました。ことばの教室未設置は貴村だけであること、来年度小学校へ入るお子さんの中には、難聴のお子さんがあること等々を話し、教室開設を訴えました。
 その年の七月二六日、田野畑小学校で「ことばの相談会」を開催することができました。この結果を基に翌日教育長、指導主事さんと話し合い「ことばの教室開設」の方向を確認できました。
 翌平成二五(二〇三三)年五月一日、岩手県最後の「ことばの教室」開級式が田野畑小学校図書室で開催されました。
 「県下全市町村に「ことばの教室を！」との悲願はこの日達成されました。



田野畑小学校ことばの教室の開級式

「親の会での出会いが気づかせてくれたこと」

岩手県ことばを育む親の会 参与 小山田 実

* 小山田さんは親の会盛岡支部長・県親の会の副会長として永く活躍されました。



まずは私に親の会活動に関わっての、思い出を作ってくれた先生方に大感謝です。はじめ、否応なしにこの世界に放り込まれ、どうしてよいのか判らず、右往左右していたことが思い出されます。恥ずかしながら、子育てに関わってこなかった自分にとって、娘のこととはいえ、「親の会」は遠い存在でした。しかし、そうは言えない父親の面子もありました。まして、情けないことに、言語教育の知識がほとんどなく、反応のしようがありませんでした。どうすれば良いのかわからず、とりあえず先輩方がしたためた参考書を読み漁りました。私にとって初めて勉強しようと思っ取り組んだことでした。それに娘のため、というタイトルがつけられているので、否応もありません。まして家内が親の会で頑張っているのを聞き及んで、何かをしないではいられませんでした。

私には恵まれていることがたくさんあります。その中の一番はことばの教室の優れた先生方と巡り会えたことです。能力が乏しくて、口下手なのですが、気が付いたら私をおだて上げ、褒め上げて、その気にさせる話術には言葉がありませんでした。

「豚もおだてりゃ木に登る」まさにおだてられて木に上らせていただきました。親の会の全国大会で、総合司会という大役を体験させていただき、会の熱い想いを味わうことができました。心配を通り越して楽しみに変わっていったことは先生方の裁量としか言いようがありません。

また、もうひと方の先生には、親の会に入会直後からお世話いただきました。いろいろ教えていただき、その中で「こういう子供がたくさんいます。何とか力になってあげてください、代わりにあなたの子供が面倒見ます」とまで言われたら、答えは「YES」しかありませんでした。優しいまなざし、優しい口調、優しい物腰、気が付いたら親の会に腰まで浸かっていました。この先生方から学んだことを三つほど紹介します。一つは、親は褒めて付き合いなさい。二つ目は自分が役に立っていると紹介なささい。三つ目はいつも前向きでいなさい。でした。すごい先生がいたものです。親の会でも経験が浅い、配慮が足りない、前向きではない父親を見かけます。どうすればよいか悩んでないで、親の会に参加してみてください、きっと解決できると思います。謝辞。



全国大会岩手大会開催要項 H3(1991)年開催

「今後の親の会活動に期待すること」

岩手県ことばを育む親の会 参与 森田 巧

* 森田先生は県内初の幼児ことばの教室の担任で、現在杜陵小で指導に当たられています。



まず、私自身の親の会活動を振り返ります。私が県親の会役員になったのは、平成三(一九九〇)年度のことです。しかし、中心となって事業を企画・運営したのは、平成五・六年度、平成九(一九九七)〜二二年度、二四(二〇一三)〜二六年度というようにそれほど長くはありません。しかし、土日や長期休業は、県難言研や県親の会の事業が優先の我が家でした。家族を犠牲にしてまでかかわったということではなく、家族の理解、協力があってできたということですが、親の会の仕事をこれまで継続することができたのは、担当としての責任感、使命感ということが大きかったと思います。

私は、総会、役員会、大会、親子合宿研修会、支部長学習会(リーダー研修会)、教室担任との懇談会(担任懇)、幼児期の言語教育研修講座(幼保研)、岩手県難聴者(児)の会「やまびこ会」など、県親の会の事業の多くにかかわりました。各事業について、目的を明らかにし、その目的を達成するための事業内容を企画立案して、実施しました。そして、実施後には反省し、その反省点をふまえて、次の計画を立てました。この繰り返しで、三十数年が経ちました。

全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会副会長を一〇年間務め全国大会に参加したり、全国ことばを育む会の大会に参加したりして、各都道府県の通級指導の状況や親の会の状況を知ること、以下のことを結論付けました。

◎ 親の会の事業の一つ一つを実施するということと自身が組織の継続となり、親の会の力となっている。

◎ 全国的にみて、担当教員の研究会(難言研)や親の会の組織活動がしっかりしているところは、教室が充実している。

「他山の石」という格言があります。一度崩れてしまった組織を立て直すことは困難です。この教育を必要とする子ども達の教育の場を守るためには、他県の状況を把握し、本県が他県と同じ状況にならないようにすることが重要です。

これまで、県親の会事務局が発信し、各支部親の会がそれを受けて、各支部が活動するという形態でこれまで活動してきました。これを今後も継続することが必要です。そのためには、県親の会は支部親の会の活動について明確に指示し、各支部は指示されたことを確実に実行していくことが大切です。各支部では、それを実施したほかに、支部単独の事業を行うことも必要です。



親の会リーダー研修会で講演 H27(2015)

「たまたまからしぜうんに」

岩手県ことばを育む親の会 副会長 岡崎 清弘

*岡崎さんは久慈支部長を経て平成一九年から県親の会の副会長を務めています。



何も知らない何もわからない自分がことばの教室と出会ったきっかけは、平成六(一九九四年)に久慈市立小久慈小学校PTA会長になったことが発端です。その当時PTA会長が親の会会長を兼任することになっていけばあて職だったんだと思います。そして同時に久慈支部長にもなる年だったんです。支部長についても久慈小学校、小久慈小学校の

親の会会長で順番にやっていたんだと聞いていました。笑い話のようですが、平成六年といえますと県親の会の一大イベントの「ついで」宿研」を、久慈地区では二回目の開催となる年になっていたのですが、なんと支部長になったにもかかわらず、一切関知すらしなかつたという現実もありました。

そんな自分が実際に親の会とのかかわりが始まったと言えるのは当時行われていた支部長学習会だったと今でも実感しています。県内から集まった各地区の先生方や各支部長さんとの語らいや、意見交換をする中で感じた皆さんの熱気や情熱で、自分の中でカルチャーショックを受けたことは紛れもない事実であり、その後の活動の原点になったと言えます。

それからは、親御さんたちの悩みや環境、待遇改善の取り組みや、「ことば・きこえの教室」設置運動に取り組んでまいりましたが、当たり前といえれば当たり前なのかもしれません。例えば今年解決した課題が、又次の年には別の地区での課題として持ち上がっているというように繰り返し繰り返し現れてくる事に対して、支部長時代はそういうことを県本部に理解してほしいと、様々な意見、注文を会議等の場でさんざん言わせてもらいました。

今現在、県本部の立場になったとき、どうかな？。

各支部からの意見を吸い上げられているかな？。もっと疑問課題をぶつけてほしいなとも思ったりしています。

これからも原点を忘れず、決して驕らず高飛車にならず、何事にもしぜうんに向き会えたらと思います。



サマーキャンプ in くじ平庭高原 H24(2012)
車イスの方も高原を自由に散策できるようにと木の道をみんなで製作(右一完成写真)

各支部の個性豊かな会の活動と子どもたちの感動的な努力の様子を伝える会報

奥州市水沢在住 勝田 敬二

*勝田先生はことばの教室担任を永く勤められ、県親の会会報編集も担当されました。



会報一〇〇号発行おめでとうございます。
親の会活動を共にし、お世話になったのは昭和四七(一九七二年)の東北大学での研修から平成一六(二〇〇四年)まで三〇数年と長期に亘りますが、会報作成に携わったのは、前任者の千葉平輔先生が昭和五五(一九八〇年)に急逝された後を受け継ぎ、僅か数年間と記憶しています。あれからもう四〇年も経過しており、会報が手元に無いので記憶違いや思い違いがあるかと思いますが、当時を振り返ってみます。

千葉先生の会報作成方針を踏襲し、一回目は春の親の会大会の報告を中心に、二回目は年度末に一年間の活動のまとめとして幹事会の報告というように定期発行に努めました。

はじめの頃は、内容は決まっているし年二回ぐらいいは何かと見くびっていました。いざB4判のファックス原稿用紙に向かって記事の割り振りや見出しなどを決めて書き始めましたが、普通学級担任の頃の「学級通信」のように進みませんでした。県内在住の見知らぬ会員となるとどうしても構えてしまい、県本部の方針を一方的に伝達するいわゆる「機関紙」の色が濃く、味気のない「会報」と不評でした。

幸い当時は釜石市立大渡小学校勤務でしたので成田廣邦会長さんと久保四男先生に、さらには盛岡の下橋中学校に転勤された菊池義勝先生から助言を頂き、支部活動の様子、会員の声、通級児童の頑張りの様子を伝えることも会報の重要な役割であると再確認させられました。その後、工夫をこらしながら支部の欄と児童の欄に力を入れた会報づくりに努力しました。

支部の欄は「支部便り」とし、県内各支部が順繰りに担当することに依頼しました。担当支部の役員さんには大変、ご苦労をお掛けしましたが、県内の親の会の活動状況を報告して頂きました。お陰で原稿依頼や情報入手のため各支部の役員の方と知り合いになり、県内の多くの会員と親しく交流できたことは貴重な体験であり、その後の転勤地で再会を喜び合ったことを思い出します。

また、児童の欄は各教室の先生方に協力を得て通級児童の作文を紹介しました。これが発展して通級児童・生徒の作文コンクールの実施と文集の発行に発展したと記憶しています。

読み応えのある豊かな記事を寄稿していただいた支部役員の方皆さん、通級児童・生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。そして親の会結成から五五年、その時々の活動の歴史が記された貴重な会報作成にわずかな期間でしたが担当させて頂きありがとうございました。



国際障害者年を記念して、親の会が発行した親と子の体験文集 S57(1982)年

ことばを育む親の会のあゆみ(概略)

1965(S40)	岩手県言語障害児を持つ親の会結成(釜石市) *ガリ版刷り会報発行(会発足・教室開設・教員養成の陳情報告)
1967(S42)	県内初の「ことばの教室」が釜石市立大渡小に開設 *第1号の会報として「教室開設」の喜びを伝える
1968(S43)	第1回親の会大会(盛岡市) ことばの障害についての啓発に力点 *S41年以降 県内各地でことばの相談会開催 支部開設が進む
1970(S45)	岩手国体の折に皇太子ご夫妻 大渡小「ことばの教室」ご訪問 *ことばの先生方の研究会発足(設置校5校、担当教員11名)
1972(S47)	県内初の「きこえの教室」が釜石市立大渡小に開設
1975(S50)	親の会10年記念大会(釜石市) 「ことば」 12市1町 「きこえ」 6市 設置 *第1回親子合宿研修会(サマーキャンプ) 開催(釜石市)
1976(S51)	県内初の中学校「きこえの教室」が盛岡市立下橋中に開設
1977(S52)	宮古市で巡回指導を試みる ~1979(S54)
1981(S56)	国際障害者年記念「親子の生活体験文”私のわがこ”」発行
1982(S57)	県内初の「ことばの幼児教室」3市で開設 ①釜石・大渡小 ②盛岡 桜城小 ③北上・黒沢尻東小 難聴学級OB会の「やまびこ会」結成
1984(S59)	*第1回幼稚園・保育園の先生方のための研修講座「幼児期の言語教育」
1985(S60)	親の会20年記念大会(盛岡市) 「ことば」 13市12町2村 「きこえ」 11市1町 「幼児」 4市 設置 記念講演-秋山ちえ子氏
1991(H3)	第14回全国言語障害児をもつ親の会大会「岩手大会」(盛岡市) OB部会(教室終了者)特設 記念講演-柳家小三治氏
1992(H4)	親の会&先生方の熱望久しい通級制度導入に向けて6校に研究指定 ①桜城小 ②前沢小 ③山目小 ④高田小 ⑤愛宕小 ⑥石切所小
1993(H5)	通級指導教室の制度化(年次計画で移行)1年次移行校4校9教室 ①桜城小 ②黒沢尻東小 ③前沢小 ④山目小
1995(H7)	親の会30年記念大会(釜石市) 「ことば」 13市29町5村 「きこえ」 8市2町 「幼児」 7市 設置 記念講演-波瀬満子氏
1996(H8)	親子合宿研修会のテーマ曲「みんなともだち」が発表される。 *これ以後の合宿研(サマーキャンプ)で歌唱
1999(H11)	新里村がこの年県内初の出前方式(巡回指導)のことばの授業開始 *村内4校を担当者が巡回して指導にあたった。 -半年度実施-
2001(H13)	「岩手県難聴・言語障害児をもつ親の会」に名称変更
2003(H15)	「岩手県ことばを育む親の会」に名称変更 *全国難聴児をもつ親の会全国研修会岩手大会(盛岡)開催 H16.3
2005(H17)	親の会40年記念大会(盛岡市) 「ことば」 13市30町10村 「きこえ」 8市5町1村 「幼児」 9市3町1村 設置 記念講演-松谷みよ子氏
2006(H18)	県内初の「LD等通級指導教室」4市4校に開設 ①盛岡・津志田小 ②花巻・若葉小 ③奥州・水沢小 ④一関・南小
2007(H19)	永年要望していた「巡回指導」が正式に実施することが可能になる。 県親の会の「ホームページ」を立ちあげる
2008(H20)	「すっぴんの会」(吃音児とその家族の会)県親の会行事としてスタート
2011(H23)	3/11 東日本大震災津波で沿岸地区甚大な被害 *緊急役員会-被災地視察・募金活動・教室復旧支援活動~2019年度迄
2012(H24)	「やまびこ会」(難聴学級OB会)結成30周年 *記念公演-横澤高德氏
2013(H25)	全市町村に「ことばの教室」開設成る 田野畑小学校への開設によって親の会の悲願を達成48年目にして達成。 *県内14市15町4村
2015(H27)	親の会50年記念大会(盛岡市) 「ことば」 14市15町4村 「きこえ」 10市5町 「LD等」 8市 「幼児」 11市2町 設置 記念講演-桜美林大 山口創氏
2020(R2)	新型コロナウイルス感染症予防のため、事業計画に多くの影響 :総会(書面開催) サマーキャンプ(延期) 幼児期の言語教育研修(中止) 他

この教育の理解充実に向けて 研修の機会を提供

平成21年9月4日号

幼児のことばの発達や発達障害についての理解を深め、適切な対応がどうあるべきかを研修するものです。 昭和59(1984)年から継続して実施しています。

県親の会主催
言語教育研修講座
開催される!

東日本大震災への親の会の取組

以下のような項目について推進してきました。

- ①被災地支援のための募金要請
- ②被災地校訪問
- ③募金活用の被災地校支援
- ④こころ つなぐ「スマイルキャンプin花巻」

平成23年4月28日号

8 お見舞いとお願ひ

三月十一日の東日本大震災で罹災された方々並びに関係者に心からお見舞い申し上げます。

さて、県内の「きこえ」ことばの教室は、八十九施設中八施設が甚大な被害を受け、たの情状であります。沿岸の学校では避難所となり、未だ多くの避難者がおられ、先生方も交代で当直に当たられておられる中、このような状況でも、復興に向けての最中に、親の会として、何かできること、何かを、震災の混乱に埋没されることがなく、子ども達に必要に教育は確立しなければならぬと強く考えます。

今年度は様々な困難が待ち受けていると思いますが、皆様方の英知と勇気をいたさき共に立ち向かって行きたいと思っております。

本親の会としては、被害を受けた「きこえ」ことば「幼児教室」が一列も早く復旧し、子ども達に学習の場が整えられるように、関係機関に働きかけます。

また、皆様には被災した教室、施設の復興のための募金をお願いしたいと思います。温かい支援の手を差し伸べていただきますようお願い申し上げます。

9年に及んだ被災地校等への支援状況の一覧

支援先学校・施設名	支援内容
大船渡市立越喜来小学校	指導用鏡・指導用具関係・指導用紙関係・遊具関係・メモリームービー・三脚・ことばテスト絵本・PYTR 絵画画、発達検査・指導用ピアノ椅子 他
陸前高田市立高田小学校	メモリームービー・三脚・ICレコーダー 巡回指導用指導鏡(貸出) iPad WIFI 32G 他
陸前高田市立気仙小学校	指導用鏡・指導用具関係・指導用紙関係・遊具関係・メモリームービー・三脚・PCプリンター 巡回指導用指導鏡(貸出) iPad WIFI 32G 他
釜石市立釜石小学校	クリーナー・巡回指導用指導鏡
釜石市立釜石小鶴住居分教室	指導用鏡・指導用具関係・手引書一式
大槌町大槌小学校・大槌学園	指導用鏡・指導用具関係・遊具関係・手引書一式・三脚・ドリルブック SDカード 他
大槌町教育委員会幼児教室	指導用具関係・遊具関係・メモリームービー・三脚 指導用薬子一式・封筒 他
沿岸地区「ことば」20教室 「ことば・LD等」23教室	手引書 各10冊 手引書 各1冊
釜石・大槌・宮古・気仙・山田 田野畑 各支部	支部活動補助金

平成23年9月17,18日 スマイルキャンプ・スナッパー

被災地区の9家族23名の参加 レク・合唱・料理・アソビ等



親の会のホームページ立ち上げ

親の会の活動、親の会の組織・関係の深い先生方の研究会、教室担当者OB会等々についての情報を平成19年からホームページ上でも見ることができるようになりました。ことばやきこえの教室の卒業生を訪ねた「先輩を訪ねて」もアップされています。

URL <http://www.iwate-kotoba.jp>

【第1回】

堂田祐輔さん

山田町大沢 ハン工場「山田湾ベーカーリー」のオーナーシェフ



【第2回】

熊谷久義さん

釜石市中妻町で理容業を営んでいる



新型コロナウイルス感染症が収まらない中での通級指導教室

各教室では様々な対策がとられていることと思いますが、
 ①②③では桜城小学校の教室の「コロナ対策について伺いました。」

これまででない指導 ～ 新型コロナウイルス感染症防止対策

世界的な感染症を予防するために、全国規模で、昨年度末から休校したり、始業日を遅らせたりする等の対策が講じられてきました。

きこえとことばの教室、LD教室、幼児教室でも状況に応じて指導開始時期を遅らせたり、保護者へのお願いやアクリル板を設置したりする等、指導の環境を整えながら、一学期の指導を実施しました。一例として、盛岡市立桜城小学校での予防対策を紹介します。

一 通級・教育相談における感染予防

保護者に、感染予防についてのお願いの文書を配付し、登校時・来校時の検温や「げんきチェックカード」記入への協力をお願いしました。

二 指導における感染予防「飛沫を防ぐ工夫」

① アクリル板やフェイスシールド等の利用
 ② 指導前後の手洗いや指導後の換気と消毒



アクリル板を挟んでの学習



フェイスシールドを使用しての学習

盛岡市立桜城小学校 幼児ことばの教室 きこえとことばの教室		月 日()	
げんきチェックカード		お子さん	付き添いの方
名 前(なまえ)			
体 温(たいおん)			
健康チェック	のどが痛い	あり ・ なし	あり ・ なし
	せきが出る	あり ・ なし	あり ・ なし
	だるい	あり ・ なし	あり ・ なし
	家族の中(上)のよ うな症状の人がいる	あり ・ なし	あり ・ なし

三 行事について

① 五月十一日(月) 通級相談開始 ※始業式は開催しませんでした。
 ② 五月十九日(火) 保護者学習会 ※時間を短縮、座席を離して開催。
 ③ 授業参観週間 ※他校の先生方に授業を参観していただきました。
 十月以降も、各教室では安全性を考慮しながらの指導が続きます。

県親の会事務局から

《令和二年度右手県ことばを育む親の会総会の概要》

令和二年度の総会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、六月中旬に議案書を各支部に送付しての書面表決書を提出していただく形で開催されました。

昨年度の活動経過報告・決算報告及び今年度の活動方針・事業計画・予算案と今後の県親の会大会・親子合宿研修会開催地案が提案され可決されました。なお、いただいたご意見に対しては、書面にて回答いたしました。

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、事業においては、総会を書面開催に変えるとともに、予定していた「三戸地区での「親子合宿研修会」は令和三年度に延期、「幼児期の言語教育研修講座」は中止とし、年度後半の「ブロック研修会」については、感染リスクに対応した開催を含めて各ブロックの判断とするとともに「すっぴんの会」については、今後の状況を見て判断することといたしました。予算面では、事業中止や延期等もあることから、会費を従来の会員一名あたり九百円から七百円に減額して納入期限を延長するとともに支出内容も見直しました。

県本部としては、このような未曾有の事態の中、一生懸命勉強している子供たちの環境改善に向けて、会員の皆様とともに、いま出来ることを着実に実行して参りたいと考えています。

編集後記

今回の特別号の発行に当たり、親の会に関わりの深い六名の皆様から、寄稿いただきました。お忙しい中ご協力いただき感謝申し上げます。
 さて、百号の編集に際し、事務局に保存されているこれまでの会報に目を通して見ました。改めて親の会の方々と教室の先生方がこの教育及び福祉の充実・発展、さらには理解・啓発に向けてたゆまぬ努力を続けてこられたことが紙面から伝わってきました。
 会発足から五五年が経ちます。この間には、全市町村ことばの教室設置という朗報もあれば東日本大震災という未曾有の災害もありました。そのことへの会の真摯な対応、取組も会報に記されており、会員の方々に会の考えや動きを伝える大切な役割も果たし続けています。と再認識したところでした。今はコロナ禍の真っ只中ですが、本会報が今後も会員の方々に様々な情報提供ができるものとなることを願っています。



編集担当 県親の会参与 津川哲一

